

# 大道芸と現代

上島敏昭

（講演に先立ち、坂野比呂志大道芸塾の仲間と大道芸の実演を行った。会場は、悪天候のため室内となったが、内容は予定通り、四人のチームでチンドン隊を組んでの入場から、簡単な装置を組んでサーカスごっこを演ずる「チンドンサーカス」と題した演芸と、私個人の輪鼓へ中国コマの曲芸。合計三〇分程度。最後に投げ銭を観客から頂いた。一五分ほど休憩の後、講演に入った）

上島です。普段はさきほどのような大道芸をやったりとか、本の編集をしたりというのが仕事で、人前でこういった話をするということはほとんどありません。昨日、練習をして家に帰ったのが夜の一二時ごろで——ああいうばかばかしいものでも一応練習はします——それから、今日お話しする内容を整理しはじめたというような具合で、どんな話ができるのか不安ですが、おつきあいください。

さきほどの、私の紹介で「見世物学会の立ち上げに関わった」と言われましたが、まずこれについて若干説明します。細かいいきさつは省きますが、「見世物学会」という学会を作ろうということになりました。産学協同の学会で

す。「産」というのは見世物屋さん、「学」というのは学者さんのことです。で、その設立に向けてのプレ・イベントを、仮設小屋をたててやろう、どうせならお祭りの場がいい、新宿の花園神社の祭りが五月だからそこで大々的にやろうじゃないかと、トントン拍子に話が進んだ。

ところが、最近のお祭りは昔とは日にちが違います。たいていが日曜日。それだけではなく、祭りには神輿が出ますが、どこも神輿の担ぎ手が氏子だけでは足りない。そこで担ぎ手の集団に協力をお願いするのだそうです。つまり、氏子とは無関係で神輿を担ぐ人たちの集団があり、彼らがどの祭りにも出掛けて神輿を担いでいる、そしてそうした人たちがいないと祭りが成立しなくなっている。そんなことを、私ははじめて知りました。そうした事情から、その人たちを確保しやすいように、近年になって花園神社の祭りは浅草の三社祭りの次の日曜日と決めたのだそうです。

そのイベントを行うについて、見世物学会を進めている見世物屋さんが、花園神社の祭りを仕切っているお仲間の方に電話して用件を述べると、「ぜひやってほしい」と言われた。「祭りはいつもの通りだな」「おおそうだ」というようなツーカーで話が決まるのがこの世界です。ところが、「いつもの通り」というのが、さきほど申しましたような事情で、二人の間でズレていた。

祭りのひと月ほど前。チラシも何もかもできて、最後の打ち合わせの場でそれが分かった。さあたいへんだ。もう大慌てで場所探しをやり直して、結局、花園神社近くの西向天神社にしむきという、あまり聞いたことのない神社に決まったのが二週間程前という慌ただしきでした。でも、ここもかなり由緒ある神社で、富士塚や文化財指定（東京都）の神楽殿もあり、その神楽殿を取り込んで作った仮設小屋は、不思議な雰囲気があつてかえってよかったという声も聞かれました。五月二九、三〇日のことです。

で、その催しに私たちも出演したのですが、その経緯を説明すると、その打ち合わせの席に私も呼ばれ、内容についての相談を受けました。聞いてみると、二日のうちの一日は山口昌男、種村季弘、高山宏といった学者さんたちの

放談会とパーティにするという。で、もう一日は、写真家の内藤正敏さん撮影のスライド上映をするのだが、それだけでは短すぎる。見世物を実演するのがいいのだけれど、見世物屋さんはいま全国に二軒しかなくて、早くにスケジュールが決まっっていて当日はだめ。「何かいいアイデアはないか」ということでした。

そこで、我々のグループで「ろくろ首」をやっていると話すと、「じゃ、それをやってくれ」ということになり、我々は見世物屋さんでもないのに、その仮設小屋でろくろ首を演じ、それを肴に学者や見世物屋さんたちが、ああでもないこうでもないと言話をするという内容になった。当日は新聞やテレビの取材も入って予想以上のにぎやかさで、立ち上げの催しとすれば大成功、主催者も大喜びだった。

そういう意味で「立ち上げに関わった」のですが、そのとき思ったのは、この「見世物学会」の中で、私の立場は何だろうということ。「産学協同」だというのが、私は、実演はするけれど「見世物屋さん」の業界の人間ではない。また何かの研究機関に属しているわけでも、研究だの学問だのというスタンスでこの世界にタッチしているわけでもない。つまり「学者」というのでもない。じゃあ、何だろう。単なる「物好き」ということか。としたら、その「物好き」というのは、見世物だの大道芸だのにとって何か意味があるのだろうか……などと、悩んでおりました、悩みつっここで話しているわけで、そんなものに付き合われる皆さんこそ、いい迷惑ということになります。しかし、僅かな時間ですから、今日のところはあきらめてお付き合いください。

ただ、迷惑をかけっぱなしというのも申し訳ない。なにか少しでも得をしてもらえないかと、いろいろ考えました。そのあげくに作ったのが、入口でお配りした「現代・大道芸年表」（一四七―一五二頁）です。もうちらちらと見ている方はきつと、こんなどうでもいいことが入っているのに、もっと大事なあれが抜けている、などと考えておられることでしょう。年表というものは、その道のエキスパートがどんなに一生懸命作っても、落ち度はあるものです。まして、さきほど申しましたように、私のようないい加減な人間が、いきがかりで、思いつきで、付け焼き刃で作っ

ていますから、落ち度も間違いも多いに決まっています。でも、こうして眺めていますと、私にはある流れのようなものは見えてきた……ような気がした。落ち度や間違いは、あとで皆さん方に訂正していただくとして、私に見えてきた大道芸の流れをお話することで、今日は勘弁していただきたいと思います。

まず、年表の作成方法から説明します。一九七〇年からはじまっていますが、これは小沢昭一さんの「日本の放浪芸」というレコードが出たのが一九七一年で、これがそれ以後の大道芸を考えるとときの指針になったようなところがありました、区切りのいいところで一九七〇年からはじめました。長いスパンを調べた末に、「ここからが現代」というように分けたというのではありません。さきほども言いましたように、いきがかりで作ったものですから、安直な理由です。その程度のもものとご理解ください。

また一九八五年からは、項目が増えていますが、これはこの年から私が大道芸の実演をはじめたからです。さきほど実演をしたのもその仲間で、坂野比呂志大道芸塾といまして、その活動を書き加えました。また、この坂野比呂志大道芸塾以外にも、猿舞座という猿まわしのグループに私が個人的に加わって、猿まわしと一緒に「里めぐり」と称して地域巡業をしたり、などという活動もしているので、そういった活動についても記しておきました。時間がありましたら、その活動についても説明します。

また、年表を作るもとにしたのは『朝日新聞』の縮刷版です。朝日だけでなく、毎日、読売なども調べるべきだったのですが、長いあいだ読んでいたりして親しみもあったので、朝日で調べました。もしかしたら、読売のほうが、サーカスをはじめとして、こういった芸能関係の記事は多いのかもしれませんが、これもおゆるしください。それでは、年代順に見ていきましょう。

まず、一九七〇年の一月。「原爆奇形を見世物に。被爆団体から抗議」という記事がしょっぱなから出てきました。さきほど説明した見世物学会のプレ・イベントで、業者の方たちからいろいろな話が出ました。その中で多かったの



が、最近、見世物をやることが非常に難しくなった、なぜならば、昔はメインの太夫さん——芸人さんのことですが——、そのほとんどが身体障害の方だった。たとえば牛娘、やまどり娘、だるま娘とか、そんなネーミングをつけてやっていた見世物はみな身体障害者です。それが、ある時期から抗議をうけて非常にやりにくくなった。本人は別に嫌いやながらやっているのではなく、小さいころからやってきて、それなりに誇りをもってやっていても、さまざまな抗議をうけてできなくなった。そういうことが随分ある。新聞に書きたてられて、私たちは本当に困っている。そういう話が何度も出てきた。それがこの新聞記事です。

ただし、それ以後、かなり注意して見たつもりですが、『朝日新聞』に限っては、これ以降こういった記事は出てこない。スポーツ新聞や夕刊紙、地方紙などにでも書かれたということでしょうか。私にはこの種の記事はこれ以外には見つけられませんでした。でも、時代の流れということであれば、このころから、被爆者とか身体障害者、被差別部落の人たちが「人権」という観点から「世間」に対して発言することが多くなってきたということは言えるのではないか。それまで、陰となって表には出ることが少なかった人たちが声を出しはじめた。世間もそれを無視することとはできなくなってきた。そういう風潮がはつきりとしてきたのではないかと思います。

また、この年の大きな出来事として、大阪で万国博覧会が開かれたことも特記すべきでしょう。三島由紀夫の割腹自殺というのもこの年です。七〇年安保で揺れた年。戦後の平和の時代に、なにかキナクさい臭いが漂いはじめた年だったのでしょうか。

翌七一年。小沢昭一さんが「日本の放浪芸」というレコードを出す。これは一年前から現地へ行って録音し、それをまとめたものです。小沢昭一さんは新劇の役者さんですが、その年、新劇はものすごく揺れておりまして、劇団民芸、俳優座、文学座が大量の脱退者を出す。小沢さんが所属していた俳優小劇場もこの年に解散しています。また、大映の倒産が取り沙汰される。その一方で、映画「男はつらいよ」の車寅次郎が国鉄（現、JR）のディスカバージ

ヤパン・キャンペーンのポスターになっている。

七二年。横井庄一さんがグラム島から帰ってきた。札幌オリンピックがあり、浅間山荘事件があり、ルバン島で小野田さんが発見されたのもこの年です。また、さきほどのディスカバージャパンとも関係あるのかもしれませんが、「ふるさとブーム」「民俗芸能ブーム」という言葉がこのころ盛んに新聞には出てきています。もっとも、私は「○○ブーム」とか「▽▽が流行」というのがメディアにのった場合、裏で誰かが意図的にそういう情報を流しているような気がして、眉に唾してかからねばと思っているものですから、この場合もどこまで本当なのか……。それから情報誌の『ぴあ』の創刊がこの年です。

七四年。小沢昭一さんが芸能座という劇団を結成する。その前の何年間かは小沢昭一といえば、俳優活動よりも大道芸の探訪ということでマスコミに出ることが多かったけれど、このころからまた芝居の人間に戻ると感じるようになった。

七五年。ちんどん屋さんをテーマにしたテレビドラマがありました。また、小沢昭一さんに関していえば、『芸能東西』という雑誌を発行する。これは年四回の季刊雑誌ですが、十冊完結をうたって創刊された珍しい雑誌です。寺山修司が市街劇「ノック」というのを公演した。これはちょっとした事件を起こして、新聞沙汰にもなりました。また、劇団黒テントが公園にテントを建てて芝居をやるうとしたら、市から許可が出なくて興行できなかったのです。その公園での芝居上演の許可をめぐっての裁判があった。

七六年。早稲田小劇場が東京を捨てて、富山の山の中へ拠点を移しました。寺山修司、黒テント、早稲田小劇場……、いわゆるアングラと呼ばれた劇団がある種の市民権を得てメジャーとなり、さらに質的な変化が起っていたということでしょうか。「知多万歳を記録映画に」という記事があります。どうやら自治体がお金を出して作ったようです。麻布の寺で「縁日の再現、大道芸が復活」というような記事もありました。

七七年。「竹山ひとり旅」という映画が公開されて、監督の新藤兼人さんが山路ふみ子賞を受賞。高橋竹山さんはいうまでもなく津軽三味線の名手ですが、これ以外にも、津軽三味線や贅女さんをテーマにした映画や芝居、テレビドラマなどがいくつも作られたのもこのころです。また、「ふるさとブーム」という言葉が盛んに出ています。これは、各地に郷土資料館がぞくぞくとできていて、五年のあいだに三割も増えたと、数字をあげて記事にしています。また、このふるさとブームに関係あるのかなのか「たたりじゃ〜」というのが流行語になっている。

七八年。キャンディーズ解散、ピンクレディーが人気、落語協会が分裂ということがあって、大道芸関連では、ギリヤーク尼崎さんという大道で舞踏をする方が踊りつづけて十年の記念公演。それから坂本長利さんが「土佐源氏」という一人芝居で海外へ。この方も小沢昭一さんと同様に新劇の方ですが、宮本常一さんの聞き書きを脚本にしたこの芝居を、いまでも演じつづけています。このころまでにもう二百回ぐらいはやっていたのではないのでしょうか。知人の家はもちろん、ガレージとか橋の下とかいろんなところでやっていたようです。上演場所といい、観客の組織の仕方といい、新劇ではありえない上演形態です。サーカスに三木のり平さんが関わって演出をするのもこのころからです。サーカス自体は数がどんどん減っているのですが、それに興味をもつ学者とかいわゆる文化人はたくさんいて、喜劇の三木のり平さんばかりでなく、萩本欽一さん、森繁久弥さん、永六輔さん、小沢昭一さん、千葉真一さんなどが手を貸すことがありました。

七九年。民謡ブームがこのころで、金沢明子が歌った河内音頭に対して鉄砲光三郎が訴訟を起こすなんていうことが話題になったりもしています。民謡に近いところ、いわゆる郷土の芸能ということでいえば、猿倉人形芝居が世界へ。これは秋田県の手づかい人形でじつに素朴な郷土芸能、これにも光があたった。民謡の公演はたくさんあるんですが、ちよつと毛色の変わったところでは、民音という音楽鑑賞団体が「東京のうた」という企画公演を行った。これは東京に伝わる民謡などを集めた公演で、東京なんか民謡があつたのかというのがまず驚くところですが、もう

ひとつ評判になったのは、大神楽とかガマの油売り、ちんどん屋さんなどの街頭の芸能や縁日の芸能もその中に加えたこと。これが当たって、何年間にわたって少しずつ内容を変えて各地で公演を繰り返しています。この公演ばかりではなく、こうした、それまではおおよそ舞台では見ることができなかった芸能、いわゆる大道芸ですとか、お座敷芸——たとえば太鼓持ちの芸ですね——が舞台に掛けられて、どれも結構な人気を博するようになっていく。

国立演芸場が開場したのもこの年です。最初はあまりお客が入らなかったのですが、花王名人劇場というテレビ番組の中継がここで行われて、その企画のひとつで「一芸名人集」というのをやったところ大入り満員になった。これは、いわゆる珍芸ですね、たとえば浪曲を語りながら手品をやるとか、「形態模写をやります」と言って、背広をパツと広げて「サンマの開き」なんていう瞬間芸があったり、野菜を切つて楽器にして即興で演奏するとか、そういう珍芸です。珍芸というより、学生が飲み屋でやる悪ふざけ程度のももあるんですが、そういう芸をいっぱい集めるというものです。それではじめてお客が入った。これもシリーズ化して何度も公演しました。本来舞台で演じるようなものではないという点では、さきほど申しました民音の企画と通じるところがあるように思います。

こうした、瞬間芸の流行は翌年（八〇年）のお笑いブームの根っ子につながっているでしょう。この年と更に翌年（八一年）にかけて、上方漫才がぞくぞくと上京してテレビでもマンザイが大ブレイクするわけです。

八〇年といえば、周防猿まわしの会の記録映画が完成する。周防猿まわしの会は七七年の一二月に宮本常一さんや小沢昭一さんなどの協力でできた会ですが、これが猿まわしの復活事業を行い、それに成功する。その記録映画です。大衆演劇が流行したのもこのころで、もう亡くなったと思われていた説経節の若松若太夫さんが、ホームヘルパーさんの叱咤激励で再び三味線を握って復活した。猿まわし、説経節と絶滅寸前の芸能が復活した年でもあるんですね。

八一年。上海からパンダのサーカス来日。宮本常一さん没。浅草の国際劇場閉鎖決定。見世物ということであれば、文化人類学の学者さんたちが「見世物と民衆娯楽」という国際シンポジウムを行った。これはのちに本になって出て

います。韓国からパンソリが来日という記事もある。パンソリは何度も日本で公演していますが、これが最初かもしれません。

八二年。説経節の若松派——八〇年に復活した若太夫さんですが——、これと八王子の薩摩派の共演。贅女歌に四年ぶりに弟子ができる。バイオリン演歌師がオツペケ会を結成。坂野比呂志、文化庁芸術祭で大賞。大道芸に関しては、いろいろあった年です。

八三年。パフォーマンスという、最近は普通に聞かれる言葉ですが、これが使われ出したのがこの年あたりからのようです。大道芸が催しものの中に出てくるのもこのあたりからでしょうか。

八四年。若松若太夫に弟子が誕生。復活からさらに一歩進んで後継者まで現れたわけです。韓国からも盛んにいろんな芸能がやって来ています。パンソリ、サムルノリ、鳳山舞踊劇、病身クツなどなど。大きな出来事としては、朝日新聞社が主催して「放浪芸の世界」という公演が行われて、全国各地を巡演した。これは日本にとどまらずアジア各地、つまり韓国やタイ、インドなどから諸々の民間芸能を招いてひとつの舞台にのせた。そればかりでなく、日本の芸能との比較研究や学者を交えてのシンポジウムなども行い、日本の芸能の源流をアジアに求めるといふ壮大なスケールの企画でした。そして、これに合わせて小沢昭一さんがレポーターになって「新・日本の放浪芸」というビデオも作られています。

八五年。この年に私は仲間と大道芸をはじめます。坂野比呂志大道芸塾というのがそれです。坂野比呂志はさきほども出ましたが、八二年に文化庁芸術祭大賞を受賞した芸人で、この会は坂野先生に大道芸を教えてもらう会です。でも、最初は大江戸観光倶楽部といていました。というのは、坂野先生は盛んに大道芸保存会を作るとか研究をするんだと言っていました。我々はどうも保存だの研究だのいうことに大道芸は似合わないと思っていた。正確に言えば、坂野先生が大道芸といっているものは、そういうことに似合わない。じゃあどんなことがしたいのか、みん



なでゴチャゴチャ言い合った末に、我々が面白がっているのは、浅草という街自体だろうということがわかった。それも現在の浅草ではなくて、ひと昔前の、劇場がいっぱいあって、人があふれていたころの浅草に興味があった。そういう環境というか、雰囲気があつてはじめて大道芸があるのだろう。それを真つ正面から「大道芸」だの「研究」だのと言つちまうのはヤボだとも思った。そこで、大江戸観光倶楽部といういかにもいい加減そうな名前をつけた。もつとも二年後に坂野先生に押し切られるようなかたちで、結局、坂野比呂志大道芸塾となつてしまいました。

で、この年に私たちがやったのは、浅草で「浅草まつり」という催しが行われ、浅草寺の境内に浅草の奥山——ここは江戸時代の末期に大道芸のメッカとして有名だった所ですが——、それを再現した。というか実際は下町風の長屋を映画のセットのように作つて、職人を入れて仕事しているところを見せる、そしてそこで製品も売る、あるいは茶店や楊弓場なども作つて休憩したり遊んだりできる、いわば回遊式の広場にしましたわけです。その計画を知つて、私が「大道芸でもやったら」と言つたところ、「金がないからできない」と言う。「だったら私が仲間を集めて投げ銭でやつてもいいか」と言うのと、ぜひやつてくれということになつて、坂野先生に教わりにいくことになつたわけです。ですから、さきほども言いましたように、保存という気も、研究という気もまったくくない。考えたのは、どうやら投げ銭がたくさん貰えるかということだけです。現在でも実演のときの基本理念は、投げ銭をたくさんもらうとうことです。ちなみに、さきほどの投げ銭は一万八〇〇〇円ほどになりました。この人数でこれほどの金額ということは、普通はありません。平均で一人一〇〇円出してくれるかどうかというのが普段の金額です、私の場合。

翌年からは、我々はほおずき市——浅草では七月九日、一〇日で、浅草観音の四万六千日しまんろくせんにちの縁日に行われます——に、浅草の木馬亭で大道芸フェスティバルという催しをはじめます。浅草は演芸の本場だとか大道芸の街だとかいわれながら、最近はまったく斜陽の街で、夜七時になると人が通らない。だから店も早くに閉めてしまふ、よけい人が通らないという悪循環。ところがこのほおずき市の夜だけは遅くまで賑やかです。一年にこの二日だけは、昔の、賑



やかだったころの浅草が突如出現する。それを知って、これは放っておくことはないということで、木馬亭を借りて催しをやったわけです。大道芸フェスティバルといいながら、木馬亭という小屋を借りてやっているという矛盾はありますが、ガマの油だのバナナの叩き売りだのを総称する演芸の名前として大道芸が一番インパクトがあった。本当は縁日の芸能ということだろうと思うのですが、大道芸と銘打った催しは、当時、お客がけっこう入った。横浜の野毛で大道芸フェスティバルという催しが始まったのもこの年です。それも同じような理由だと思います。

八七年。サムルノリと伊勢大神楽、猿舞座の共演。長野県的美麻村という、伊勢神宮に神宮大麻の材料になる麻を納めていた村だというのが、ここで共演をした。東京の大神楽曲芸協会が五〇周年を迎えた。

八八年。リングリングサーカス来日。これは世界最大のサーカスでアメリカから出たことがなかった、そのはじめての引っ越し公演ということだといへん評判になりました。一角獣というのが出るというのが、このときの目玉でした。私も見ましたが、通常のサーカスのリングが三つあって、それぞれで別の曲芸をやっている、ものすごく大掛かりなサーカスでした。その三つのリングをとり囲んで外側に大きなリングがあり、そこを動物と人間がずらっと並んでパレードする。象が五頭ぐらい、トラやライオン、馬などでもないではないでしょうか。人間の数も何百人のパレードですから、とにかくばかでかい規模でした。ただし、私の見た席からは芸らしい芸は見えなかった。一角獣も私にはヒツジにしか見えなかった。翌年も来ましたが、私は行きませんでした。私だけではなく、最初の年に見てがっかりした人は多かったです。この年の公演は大赤字で招聘した会社がつぶれ、裁判沙汰になったようです。

このサーカスはしかし、大きな置き土産を残しました。クラウン・カレッジ・ジャパンというクラウン養成学校を作ったのです。これについては、あとで触れます。

八九年は昭和天皇が亡くなって、年号も平成に変わりました。大道芸にとって、というか芸能界にとって八八年の秋から八九年正月は大変でした。というのは、昭和天皇の病気でいろいろな祭りや催しが自粛して中止。このために

芸人さんたちは仕事のキャンセルが相次いで、芸人さんが何人か集まるとそんな話ばかりしていたのを覚えています。文化庁の芸術祭で八八年には若松若太夫さんが、八九年にはバイオリン演歌の桜井敏雄さんがそれぞれ芸術祭賞を受賞。また私たちの師匠だった坂野比呂志が亡くなったのも八九年。このあたりはやはり大道芸にとっても時代の変わり目だったような気がします。

九〇年。東京デイズニールランド、一兆円産業に。周防猿まわしの会の代表、村崎義正さん没。

九一年。警女歌ネットワークというので、継承へ。このころ弟子入りした方が今各地で警女歌を公演しています。警女は昔から盲人の語りものだったのですが、この方は清眼の方ですから、そういう意味では伝統的ではないのかもしれませんが、とにかく警女歌という芸能は継承された。若松派の説経節が継承されたのと同様です。

また、私の個人的な見解かもしれませんが、上野公園を中心にして、各地で大道芸が盛んに行われていた。このころが、最盛期だったと思います。

九二年。ちんどん屋さんの音楽がCDで発売されます。それまでもちんどん屋さんはカセットテープになったりはしています。でもこのCDは、ちんどん屋さんの演奏を音楽としてとらえたもので、その点で画期的だと思います。このCDがひとつのきっかけになったのかどうか、現在はジャズのプレーヤーの人たちがこの世界にどんどん入ってきて、この業界は今、非常におもしろい。街でちんどん屋さんを見掛けたら、ぜひ聴いていただきたい。

それから暴力団新法が成立したのもこの年です。これは本来は、山口組とか住吉連合とかという暴力団を対象にしたものですが、香具師さんたちも〇〇一家を名乗っていて、警察の考えでは同じ仲間と見なされているのだそうで、この法律は露店営業をする人たちにとってはかなり重い足枷になっているようです。

九三年。大阪、天保山の海遊館前広場で大道芸が常時公演されるようになります。上野公園はじめ各地の歩行者天国でやっていた大道芸は九一年をピークに取り締まりが厳しくなって、ゲリラ的にやられてはいましたが、その数は

圧倒的にすくなくなっていました。それが、海遊館前広場で行われるようになって、東京の大道芸の人たちも交通費をかけてまで出掛けるようになった。いまは横浜のランドマークタワーの下とクイーンズスクエアで毎週やっている。ナマの大道芸もぜひ見ておいていただきたい。

ベンポスタ子どもサーカスの来日。このサーカス団も何度か来日していますが、ユニークなのは神父さんを中心に、あとは子どもたちだけのコミュニケーションを作っていて、その財源としてサーカスをやっているという不思議な集団です。サーカスの芸というのはものすごい才能と習練が必要だといわれるけれど、実際は、子どものときにやろうと思えばだれでもできる。サーカスの秘密主義のようなどころを排除してしまったという点でも、この集団は画期的だったと思う。

九四年。パリで日本の縁日を公演。この公演の特徴は、この企画に携わったのが本職の香具師さんたちだったということ。たてまえはいわゆる「芸術家」が企画したとされていますが、イベント屋を通さず、また行政主導でも大企業のカンムリでも主催でもなく、その業者の人たちが作り上げた企画ということで特筆しておきたいと思っています。

九五年。地下鉄サリン事件の年です。「旅するパオジャンフ」という台湾の香具師さんの映画が公開された。題材となっているのは小さな一座で、自動車で移動して、街の広場でショーを見せる。女の子が短いスカートで踊る、かなりきわどいショーですが、そのショーを見るのはタダだけれど、一番盛りあがったところでヘビの薬を売る。半分ドキュメンタリー、半分ヤラセのような映画で、とてもおもしろかった。

インドの紙芝居と影絵芝居の公演もありました。人間ポンプの安田里美さんが浅草で公演を行って、そのひと月後に死亡したのもこの年でした。

九六年。バイオリン演歌の桜井敏雄さんが亡くなりました。桜井さんは関東大震災の前からこの世界に入って、ずっと街頭で歌っていた方で、この方が亡くなって、バイオリン演歌の流れが切れました。「『サーカスが来た』展」

「シャガールのサーカス展」が相次いで開かれ、ネオシルクと呼ばれる、新しい形態のサーカスがつぎつぎに来日、もしくは日本で結成されて公演を行った。横浜のランドマークタワー下の広場でゲリラ的に大道芸がはじまったものころです。

九七年。国際紙芝居協会旗揚げ。これについては私はまったく知りません。これ以後活動しているのかどうか。いま、昔ながらの街頭紙芝居は大阪で一グループだけ残っている。東京ではたぶん一人だけではないでしょうか。他にもたくさん紙芝居を名乗っている人はいるようですが、ほとんどがイベントに呼ばれてやる人たちで街頭紙芝居ではない。これは区別したほうがいいと私は思っています。サーカス村の計画という記事がありますが、これは九八年に国際サーカス村として実現して動き出しています。新国立劇場オープン。六〇年代にできた国立劇場が伝統芸能の上演が目的だったのに対して、これはオペラやバレエ、それに新しい演劇をやっているという劇場です。

急ぎ足で、およそ三十年の大道芸とそれに関わるあれこれをたどってきました。だいたいの流れは押さえたつもりです。こうしてたどってみた私の実感を言いますと、この三十年ばかりの間に、大道芸のおかれている状況はもちろん、大道芸それ自体も大きく変わってしまった。そう思える。その大きな変化を象徴する出来事というのが、三つほどあるのではないかと私には思えます。

それは、一番目は、何度も述べているように、小沢昭一さんの「日本の放浪芸」。二番目が坂野比呂志が大道芸の口上で文化庁芸術祭大賞を受賞したこと。そして三番目が静岡で行われている大道芸ワールドカップ。この三つが現代の大道芸の変質を象徴しているのではないかと考えますので、その三つについてちょっと詳しく述べてみたいと思います。

まず、小沢昭一さんの「日本の放浪芸」。これがどういう意味をもっていたかを考えてみると、一九七〇年という時点で、日本の大道芸を網羅した記録だという点でとても重要だと思う。レコードは七枚組で、一と二が祝う芸、三

が解く芸・話す芸、四と五が語る芸、六が商う芸、七が流す芸という構成です。

祝う芸に入っているものは、全国にある万歳。会津万歳、尾張万歳、三河万歳などなど。その他には人形まわしや大黒舞、春駒などの正月に訪れた祝い芸です。解く芸・話す芸というのは、絵解きの系譜と舌耕芸で、各地の神社仏閣で行われていた絵解きと、その芸能的な発展形である覗きからくりなど。舌耕芸では節談説教といひまして、お説教に節をつけて語る芸。すべての語り芸のルーツとも言われているものです。それから、講釈、にわかなどが入っている。四枚目は盲人の語る芸。瞽女歌、奥浄瑠璃、イタコの口寄せ、肥後琵琶など。五枚目は浪花節の源流となった語り芸の探訪です。浪花節というのは幕末から明治初年の動乱期に、全国のいろいろな語り物が複雑にからみついて原形ができ、やがて三味線の伴奏で語る現在の形態に落ち着いた語り芸です。門付けから、ヒラキとよばれる葦簾張りの投げ銭公演をへて、寄席に進出し、さらに劇場へと公演形態も変化させたという点でも興味深い芸能です。その浪花節の原形となった芸能を集めたのがこの一枚です。貝祭文、あほだら経、ほめら、江州音頭などが入っている。

六枚目の商う芸というのは香具師さんの芸です。大阪の四天王寺や京都の東寺の縁日の実況録音です。どちらも弘法さんの縁日で毎月二一日に行われていますが、四天王寺は特に春と秋のお彼岸は非常に大きい縁日になる。家相見が絵解きをしていたり、ヘビとマンガースの戦いを見せてヘビの薬を売っていたり、薬草の説明をして本を売ったりしている。それから見世物小屋もこの中に入っている。易者さんやバナナの叩き売り、競馬の予想屋もあります。七枚目の流す芸は歌舞伎の声色屋。願人坊主の芸、大神楽、飴屋さん、猿まわし、虚無僧なんているものも入っている。

きちんと数えてないですが、数十種類の芸能が、現地で録音された。小沢さん自身はこれらの芸を「放浪芸」と呼びましたが、これらを訪ね終えた印象を、大道の芸能は絶滅寸前だったと述べています。「私には、これを保存するとかいうことではなく、臨終に立ち合うことぐらいしかできなかった」とも言っています。

では、小沢さんはなぜこんな芸能を訪ねたのか。その動機を、芸能者として自分の立っている位置を見つめたかつ



たと述べています。映画や演劇は、いまでは「芸術」と呼ばれ、俳優や演劇関係者も世間から尊敬されたりしますが、それほどのものなのか、もともとは河原乞食と貶まれていたではないか、というのが放浪芸探訪の出発点にあり、それらの現在を知りたかった。そこで、立派な芸能におさまった映画や演劇、テレビでなく、また「伝統芸能」とか「郷土芸能」などと持ち上げられもせず、檜舞台にのることもないし、知識人の評価の対象外で記録や研究もほとんどないような芸能を訪ね歩いた。

この放浪芸探訪の二年間ほど、小沢さんはほとんど俳優としての仕事をしなかったとも言っていますが、どうしてもそこまですることには打ち込んだのか。それについては小沢さん自身はあまり語っていない。というか語ってはいいても、どこかではぐらかしているようですが、その時代背景を見てみるとなんとなくわかるような気がします。

小沢さんは新劇の役者さんですが、新劇のステイタスともいうべき劇団民芸、俳優座、文学座で、相次いで劇団員が劇団を批判して大量に脱退して話題になりました。その一方で、そういう大劇団を小馬鹿にするようなアングラ演劇が大きなエネルギーをもって登場して人気を集める。つまり既成の演劇のありかたが、根底のところまで問い直されていた。小沢さんの所属していた俳優小劇場も、こうしたうねりの中で、劇団員で討論し解散を選ぶわけです。

その既成の演劇の解体時に現れたアングラ演劇というのは、普通の劇場を捨てたところから起こっている。アングラ演劇の旗頭のひとりだった寺山修司さんのアジテーションに「書を捨てよ、まちへ出よう」という言葉がありました。彼らは赤テントや黒テントのようなテント芝居、客席数十のビルの地下室や喫茶店、あるいは野外の広場を演劇の現場として選びました。街の中に演劇空間を求めたといえるでしょうか。彼らが捨てたのは劇場だけではありません。戯曲や俳優の演技技術という、演劇にとって自明だったものも拒否した。象徴的にいえば、演劇は何なのかを探して、俳優は、戯曲や演技で武装しない生身のままで街の中へ飛び出し、観客と向き合った、といえるでしょうか。ここから大道芸への距離はさほど遠くはないでしょう。



このような、既成の価値観への反発、あるいは疑問は、演劇の中だけではありません。ついこの間、東京都現代美術館で一九六〇年代を中心とした現代芸術の展覧会をやっていました。ここに展示されていたものも、いわゆる「美術」という言葉からはおよそ想像もできないような奇妙な「作品」ばかりでした。たとえば、ボクシングのグローブを絵具に浸して、それでキャンバスを殴りつけて、「作品」。殴った結果できた模様だけではなく、どうやらその過程を作品と呼んでいるようでした。

また、赤瀬川原平さんの一万円札の精密な模写も展示してありました。これは貨幣の偽造とされて刑事事件になった有名な「作品」です。で、これはそれだけではありませんでした。それが裁判になったときの裁判所でのさまざまな記録まで「作品」として展示してある。これには脱帽しました。裁判の証拠品のあれこれ、たしかペンとかパレットとかインクとか紙もあったかな、とにかくそんな品々がいちいち荷札に番号が書き込まれて展示してある。また裁判の部屋の平面図があつて、誰がどんなふうに動いたかまで綿密に記入してある。これも「作品」。赤瀬川さんのはちに今和二郎の「考現学」に触発された活動をしています。もうこのときに似たようなことをしているんですね。赤瀬川さんのやったものでは他に、銀座のお掃除があります。もちろん慈善運動でも宗教活動でもない。何人かの仲間と白衣を着てマスクをつけ銀座の通りをお掃除して歩いた。昔は伝染病が発生すると保健所がこんなことをやったらしいですから、その場にいたらかなり気味が悪かったと思う。これも「芸術作品」です。当時はこうした芸術を「ハプニング」と呼んだようですが、のちに大道芸と呼ばれたものとほとんど変わりません。

また、誰の作品か記憶していませんが、台が一つポコンと置いてあるのもありました。説明を読むと、この上に誰かが立つと、それで「作品」となるのだ、というようなことが書いてある。大道芸をやる私としては、なるほどと思いましたね。大道芸というのは通行人の中に突然、演技者として登場するわけです。ですから通行人から演技者に変身する瞬間というのがとても重要です。台に立つというのは、簡単だけれどとても有効なひとつの方法だろうと思う。

大道芸も芸術作品も非日常を演出するという点で共通するのでしょうか。

余談ですが、この間の見世物学会のときに、秋山裕徳太子さんが出演してパフォーマンスを見せました。ランニングシャツを着て、SPレコードを流して走り回るだけの、なんとも評価しにくいものでしたが、これが彼の中では「見世物」なんでしょう。秋山さんは以前、「美術家」という肩書で都知事選挙に出て話題になった人です。石原慎太郎と美濃部亮吉の激戦のときだったと記憶しています。「秋山裕徳太子」という字面だけでもかなり滑稽ですが、ポスターの掲示板に、真剣に未来を見つめている立派な面々の横に、妙にすまじきってチョビ髭を生やした、いかにも胡散臭い顔が並んでいたのが強烈でした。あの都知事選自体が、美術家の彼にとっては「美術作品」だったんでしょね。走りまわる彼を見ながらそんなことを思いました。

話がそれましたが、そういう価値観の崩壊の中で、新劇人である小沢さんは自分の職業の寄りどころをさがした。そこで、昭和のはじめ、自分が物心ついたころまわりにあった縁日や巷の芸に目を向けた。改めてそうした芸能を見つめようとしたら、昔は時期になると訪れてきたそういう芸が、いつのまにかほとんど訪れなくなっていたので、小沢さんが逆に訪ねて行ったということなのでしょう。

ちよつと時代は下りますが一九七五年に、寺山修司さんが市街劇「ノック」という公演をやっています。これはどういうものかというと、東京の阿佐ヶ谷地区の街のあちこちで同時多発的に演劇を行うというものです。たとえば、体中に包帯をまいたミイラ男が街をうろついたり、花嫁衣装の女性が走ってみたり、ひと月ぐらい前から毎日誰かの家に手紙を出しておいて当日訪ねたり、というもので、観客はチケットと交換に受け取った地図を見ながら、街を歩きまわって演劇を探すのです。おだやかな住宅街の一画で、突然、役者が何事かをはじめるとその周りに地図をもった観客が集まる。その観客にまじって物見高い野次馬も駆けつける。当の住民は何も知らされていませんから大騒ぎになった。

そんな中で当然のように警察沙汰の事件が起きました。それは、トントンとドアを叩く人がいる。奥さんが開けてみたらミイラ男が立っていて、まわりでは何十人も人間がジロツと見ていた。びっくりして卒倒し、その拍子に妊娠中だった奥さんは流産したというようなもので、寺山さんは警察に事情聴取されています。

これが犯罪として成立したのかどうかは調べませんでしたが、この事件についての寺山さんの発言が文化欄に載っていました。「あなたの平穩無事とは何かを問う」。こう題されています。「劇は有るのではなく、成るのである」と彼は言います。つまり、演劇というのは最初から成立しているのではない、あなたが見ることで始めて成立するのでしょうか。そして「大道芸的なイベントをやるのは、劇と関わり、そういった劇を成立するための呼び水なのだ。ドアをノックして開けたら包帯男がいたのが恐怖だったというのなら、ノックして開けたら国勢調査員が出てきたらどうなんだ」と。そのほうが恐怖じゃないのかと。世間一般の論理ではそれは通らないでしょうが、理屈ではまったくその通りと、私などは思ってしまう。

寺山さんは日常の中の想像力の問題を言っているのだと思います。ミイラ男に国勢調査員を重ねてみることでできる想像力です。むしろお前の方こそ、誰かに身のまわりを侵されてるのに気がつかないのではないかと言っているのでしょうか。寺山さんがここで述べている理屈は、大道芸にもそのまま当てはまると思います。つまり、大道芸というのは最初からあるのではない。大道で何かやっても、人がそれを見過ぎて通過ぎていくうちに大道芸にはならない。立ち止まって見る者が現れてはじめて大道芸が成立するのです。逆にいえば日常に行われていることでも、それに興味をもって見る人が現れたら大道芸になってしまう可能性もある。

そして、このころ「大道芸」といわれたものは、実は見る側が「大道芸」と思って見ることによって大道芸とされたものばかりだったのです。小沢さんのレコードでいえば、祝う芸は、万歳も大黒舞も獅子舞も「芸能」というより「祈禱」です。少なくとも、お金は祈禱料として支払われている。琵琶盲僧の演奏もお祓いです。香具師さんのもつ

とはつきりして、芸は人を集めるための方便で、お客には本や薬を売ります。こうしたものを「芸」と思うことができるのは、想像力のたまものです。

浅草の街を歩いていると、地面に何か置いて引っぱり合ってけんかしているような人たちに出会うことがあります。立ち止まって見るとけんかではなくて、ズボンや背広を引っぱり合って何かブツブツ言っている。もっと興味をもった誰かが彼らに近づくと、その人につられるように三人、五人、七人と人が集まってきて人だかりができ、これは安い、これはいいとか、商売の場が変わる。そしてまたくまに何本かのズボンや背広が売れてしまうと、スウィーツと人だかりが消えて、またいつもの人の流れになってしまう。時間にしてほんの数分のズボン（背広）の街頭販売です。ときどきこんな光景に出会うことがあります。これは七、八人の買い手も売り手もメンバーはいつも一緒。おそらく人だかりの内に本当の客は一人でしょう。これも大道芸だといえば皆さんは驚くでしょうか。坂野比呂志はこれとほとんど同じものを大道芸として舞台でやっています。「泣きバイ」と言いますが、当然買った人は、ズボンを買ったつもりで、大道芸に巻き込まれたという意識はない。

つまり、これを芸と見ることができなにかは、それを見る側の意識の問題です。私は浅草ではじめてこの光景を見たとき、思わず嬉しくなつてカメラを向けようと思いました。でも、よく考えたら、これに正面からカメラを向けることはできない。どう考えたってサギ、そうまでいわずとも、まっとうな商売ではない。これに「芸」を発見して面白がっている私は、逆説的ですが、彼らのお客にはなれない。彼らのお客は、ズボンを買う人であつて、その人たちはこれを芸などとは決して思わない人です。伝統的な大道芸の多くは、それを大道芸だなどと思った途端、成立しなくなってしまうという側面をもっていたのです。

それが坂野比呂志が文化庁芸術祭で大賞をとったあたりから事情が変わってきます。演芸のジャンルとして「大道芸」が現れたのです。坂野比呂志は我々の師匠で、風俗漫談と称して舞台に立つ浅草の芸人でした。最初は活動写真

の弁士の弟子になり、浅草オペラから軽演劇をへて漫才を長いことやっていた。その相方が亡くなってから、一人で漫談をやるようになりました。

坂野先生が文化庁芸術祭で大賞をとったのは、昭和五七年（一九八二）、浅草の木馬亭という寄席で行った「坂野比呂志のすべて」という公演でした。その昔、芸術祭はたいへん権威がありました。このころになるとかつての威光は消えて、受賞発表などにたいしたニュース・バリューはありませんでした。ところがなぜかこの年の坂野先生の受賞は大きな記事になった。朝日、読売、毎日、どれも格段の扱いです。そしてどの新聞でも見出しは「大道芸に芸術祭大賞」「大賞に大道芸の坂野さん」「大賞だよ、お立ち会い、坂野さん、大道芸に初の栄誉」という具合。これを見れば、坂野比呂志は大道芸人だと誰もが思うでしょう。でも坂野先生は、若いころ、ちょっとだけ香具師さんの仲間に入っていたことはあるようですが、サカズキを交わしたこともその傘下でタンカバイをしたこともない。大道芸人だったことなど一度もないのです。

我々が坂野先生に習った見世物小屋の呼び込み口上に「かわいそうナは、この子でござあい。この子の生まれは北海道、十勝の国は石狩川の上流で生まれまして、ある日のこと、この子のお父さん鍬にてマムシの胴体真つ二つ……」というのがあるのですが、見世物小屋の方は「私たちはそんなこと絶対に言いません。そんな口調でもやりません」と厳しく叱られました。坂野先生は、見世物の呼び込み口上以外にも、バナナの叩き売りやガマの油売り、飴売りなどを演じていましたが、どれも大道の現場で身につけた芸ではない。本人も「俺は大道でなんかやったことはないよ」とよく言っていました。

でも、坂野先生の口上を聞くと、なんとなくそれらしいイメージが湧く。見世物小屋の方に叱られて私は「どうもすみません」と謝ったのですが、坂野先生の口上を聞いてそれらしいと思ったのは私ばかりではない。としたら、坂野先生の芸がどこから来たものなのか考えてみる必要があるのではないかと、今は思っています。



それはともかく、寄席の漫談の芸人だった坂野先生は、この受賞以後、舞台ではなく、ほんとうに野外イベントを頼まれることも多くなった。坂野先生自身はそれでも、バナナの叩き売りなどをやる時には、ビール瓶のケースを何個か用意させその上に板を敷いて簡単な舞台を作らせて、大道の芸人とは一線を引いて演じるのが普通でしたが、見る者にはそんなことは関係ありません。同時に、もともとあまり「風俗漫談」というジャンルの呼び方にはこだわらない人でしたから、「大道芸」と紹介されることも多くなり、いつのまにか「大道芸といえば坂野比呂志」「坂野比呂志といえば大道芸」ということになってしまいました。つまり、大道で演じる芸だから大道芸なのではなく、坂野比呂志の演じる、バナナの叩き売りやガマの油売り、飴売りなどの演芸を総称して「大道芸」と呼ぶようになったのです。

坂野先生が受賞したのが一九八二年。時代はバブル景気に向けてひた走っていきます。大掛かりなイベントが次から次へと仕掛けられ、地方の時代、町おこし、村おこしなどの名目で大小さまざまな催しがあちこちで行われました。同時に、東京ディズニーランドに代表されるテーマパークも続々とオープンする。京都の太秦映画村や日光江戸村なども年間百万、二百万の観客を呼んでいます。そうした大掛かりな催しのアトラクションは、劇場芸や寄席芸では対応できませんでした。街並みをそのまま舞台装置としてしまう「大道芸」は、こうした場にまさにぴったりののだと思います。

坂野先生の受賞はそうした意味でも時代のニーズに応えるものだったわけです。こうしたイベント会場で行う演芸は、それまでは、落語や講談、漫才の人たちが本芸の傍らのアルバイトとしてやっていた。それが坂野先生の受賞と、大道芸という演芸ジャンルができたおかげで一気にマーケットが開けた。中には本芸を捨てて大道芸に移行する者も増えてきました。寄席芸人だけではなく、キャバレーの司会などをやっていたボードビリアンもこのマーケットに参入してきます。そればかりかアマチュアのグループも生まれる。我々、坂野比呂志大道芸塾もそのひとつです。



それもやっぱりこうした時代背景があったからだろうと思います。

また、これとは別の大道芸も起こりつつありました。竹の子族というのがそれです。彼らは日曜日になると、どこからともなく原宿に集まってきて、明治神宮脇の歩行者天国を舞台に、奇妙だけれど統一のとれた衣装を着て、大きな輪になって、天真爛漫に踊っていました。これは坂野比呂志が芸術祭で受賞する少し前にはじまり、次第に人数が増え、皮ジャン姿で五〇年代のロックンロールをラジカセで流して踊るグループや、ブレイクダンスというニューヨークで流行している仰向けに寝転がって背中ぐるぐる回るダンスも登場して、一時期の原宿は踊る人とその見物人とで芋を洗うような状態でした。マスコミは彼らを「大道芸」とか「パフォーマンス」と呼んだのです。

いまでは「パフォーマンス」と聞いても何も新しさは感じませんが、日本でこの言葉が使われるようになったのはこのころからです。ダンスとか、詩の朗読、演劇、音楽、映像などのジャンルをクロスオーバーさせたり、垣根を無視したりした新しい身体表現の呼び名でした。事実、一風変わったさまざまな新しい表現が現れましたが、その背景には急激なハイテク技術の進歩と普及があります。

たとえば、電子楽器やコンピュータ・グラフィックスが一般化したのはこのころです。それまでは、音楽なら楽器を使いこなし、美術作品なら絵筆や竹ペラを使いこなしで作るものだったのに、パソコンのスイッチひとつですべてができるようになったわけです。かつては作品を作るために毎日技術を磨いたものですが、技術など必要のない作品が登場したのです。当然、表現の核にあった身体技術は大きく揺らぎます。同時に、演奏でも絵画でも、作品はたつたひとつだったのに、そうして作られた作品は再生可能で、オリジナルとコピーに差はありません。作品というものの根本的な概念すら変わってしまったのです。

また、テレビゲームが登場し、CDやビデオやテレビが急激に進歩して普及したのもこの時期です。いまでは珍しくなくなった、テレビつけっぱなし、音楽かけっぱなしという生活スタイルもこのころ一般化したのだと思います。

当然、人と人とのつきあいは希薄になり、自分の耳や目よりも、テレビから情報を得て暮らす生活になった。テレビでは、ドラマもニュースも同じように流れます。殺人事件の推理ドラマのあと、現実の殺人事件が報道されるのはほとんど毎日。体当たり取材と称する番組の多くはヤラセが常識という一方で、豊田商事事件のように、テレビカメラとレポーターの目の前で殺人が行われたりして、現実とフィクションの境はきわめてあいまいです。それを見る人の数は膨大で視聴率わずか一パーセントといっても日本中では一〇〇万以上の人が見ている。かと思えば、たった一人の見物人を想定して作ったA Vビデオというものもある。いまの私たちの現実感覚は、三〇年前とはずいぶん変わってしまっていると思います、その転換点がこの時期にあった。

こうした事態に直面して、表現者たちはあるいは戸惑い、あるいは面白がり、自分たちの表現の可能性をさぐって、さまざまな実験を行いました。日本で「パフォーマンス」といったのはこうした表現行為のことです。このころ盛んに行われたのは、映像とダンスを融合した表現とか、環境映像を流しながら即興的に詩を作る、あるいはボイス・パフォーマンスと称して無意味に叫ぶというようなこと。楽器を壊しつつ演奏するなどということもあったように記憶しています。会場もいわゆる劇場を離れて、美術館だったり、ブティックの一画だったり、住宅展示場だったり、じつにさまざまでした。

でも、そうしたものをいくつも見てきた私の実感からいえば、かなりのものが六〇年代の「ハプニング」とそっくりでしたし、即興的といえは聞こえはいいけれど場当たり的で、創作力の衰えを見せかけだけは取り繕ったこけおどしにすぎないものも多く、宴会の席での瞬間芸のようなものもこう呼ばれるようになったりもしました。

それはともかくとして、そうしたパフォーマンスの中で、もっとも一般的でわかりやすかったのが、演じる場所在路上を選んだ「ストリート・パフォーマンス」でした。単にパフォーマンスといったとき、それを指している場合も多かったように思います。大道芸というと、日本の伝統的な感じがするので、それと区別して外国からやってきたも

のや洋風なもの、日本の伝統からはずれたものをこう呼んだという面もあるでしょう。

明治神宮脇の歩行者天国には私もたびたび足を運びました。でも何か違和感がある。何か違う。その違和感は何かというところ、彼らの踊りはひとりよがりなのです。演技の開始も終了も判然としません。だからだといつまでも踊っている。踊っている人間は気持ちいいのかもしれないが、見る者はおもしろくもなんともない。なにか拍子抜けして帰ることが多かったのですが、何度か行くうちに決定的なことに気がつきました。彼らはお金を取らないのです。ただで見学できるから安上がりなのですが、こんなものに金は払いたくない。まったくとりとめがなく、しまりがありません。見るものではなく、自分で踊るものだったのです。現代の「ええじゃないか」と呼んだ人もいましたが、私にはとても気持ち悪い集団に思えた。

あとになって、竹の子族というのは洋服屋の宣伝だったことがわかり、ここで大道芸をやっていてデビューしたという「一世風靡」というのも、マスコミのヤラセだったことがわかって納得すると同時にしらけもしましたが、考えてみれば、これは大掛かりな「泣きバイ」みたいなものともいえるわけです。六、七人のサクラで一人の客を引っ掛けるのではなく、広告代理店主導で、湯水のごとく金をかけ、全マスコミを巻き込んで日本中を引っ掛ける大規模な「泣きバイ」。こういうのを寺山修二さんだったら何と言ったでしょうね。

また脇道にそれてしまいました。ちよつと時代は下りますが一九八七年四月に、小沢昭一さんが「大道芸はほとんど絶滅して、復活したのは猿まわしだけ」と述べています。「芸能史を歩く」という連載記事の中でのことです。当時はパフォーマンズ全盛の時代。なぜこんなことを書いているのか多くの人が不思議に思ったに違いありません。でも、小沢さんが「大道芸」といつているのは「芸を演じて、直接お客からお金をとるか、ものを売る」芸能なのです。いくら原宿をはじめとして各地の歩行者天国でたくさんの方がやっていますが、それはやる側の自己満足でお客が想定されていない。私がパフォーマンズを気持ち悪く感じたのもまさしくここなのです。

パフォーマンスだけではありません。坂野先生がやっていたような「大道芸」も、小沢さんの定義に当てはめれば大道芸ではない。それはイベントの場でギャラをもらって演じている演芸です。繰り返しますが、大道芸という名前の演芸です。あのサギまがいの「泣きバイ」こそが、小沢さんのいう「大道芸」で、それはまさしく「絶滅寸前」。坂野先生のようにそれを舞台でやったら、「大道芸」ではない。

そんな中で猿まわしだけは確かに復活しました。復活事業は京都大学霊長類研究所と実演者との産学協同で組織的に行われ、調教における秘密を公にして、学問的にそれを体系化しました。この努力の甲斐あって現在は、おそらく猿まわしは全国に一〇団体以上、演者も一〇〇人を超えるでしょう。街頭興行を目指している人たちはたぶんいないでしょうから、大道芸として復活したとはいえないかもしれませんが、「猿まわし」という芸能自体は復活したといえるでしょう。

でも、芸能は観客がいなければ成立しない。猿まわしが復活できたのは、それを受け入れる観客がいたからです。なぜ社会の側がそれを待ち構えていたように受け入れたのか。それについても考えてみなければなりません。今テレビを見ても、動物番組は非常に多い。自然が身の周りになくなったものだから、せめてテレビだけでも見ようとしているのか。そんな心意が猿まわしを受け入れる下地にあるのでしょうか。

こうして「大道芸という演芸」が生まれたあとにやってきたのが、「大道芸大会」の時代です。大道芸をメインにした大掛かりなイベントというと、富山市のちんどん大会は一九五四年に開始。これは別としても、七八年に名古屋の大須観音を中心とした大道町人まつり、八五年に横浜の野毛大道芸フェスティバルなどが登場して人気を博し、その決定版として登場したのが、静岡の大道芸ワールドカップでした。これは九二年に第一回が開かれ、今年で八回目を迎えます。

静岡の大道芸ワールドカップ以降、大道芸のイメージは大きく変わります。それまでは大道芸といえば、ガマの油

やバナナの叩き売りなどを想像したのですが、最近ではボールを投げ上げたり、火のついた棒を何本も回したりするジャグリングを思い浮かべる人のほうが圧倒的に多い。事実、こうした大会には、ガマの油やバナナの叩き売りはほとんど出ることがありません。

ジャグリング自体は日本でも古来から行われていて、寄席の演目では「大神楽」といい、旧くは「放下芸」といつていました。でも、演芸としての大道芸ではあまり行われませんでした。ところが、静岡の大道芸大会では、日本人の演者もふくめて八割ぐらひはジャグリング。あとは、パントマイム、手品などです。ジャグリングは日本の放下芸と技術はほとんど同じです。でも、衣装はもちろん道具も演出もだいぶん違う。彼らが学んだのは日本の伝統芸ではなく、外国流の演出方法なのです。

八〇年代の「パフォーマンス」全盛のころ、歩行者天国で竹の子族やローラー族が踊っているなかに、ジャグリングやパントマイムを見せて投げ銭をもらう外国人がいくら混じっていました。彼らはアメリカやヨーロッパからやってきたストリート・パフォーマーです。それが本職だったかどうかはともかくとして、きつちりと投げ銭を要求するスタイルでした。投げ銭を英語でハットマネーというのだそうですが、このスタイルはヨーロッパやアメリカの街角や広場ではしばしば見掛けるものだったようで、たとえば、ロンドンのコペントガーデンやパリのポンピドー広場などの話はよく耳にしました。そこは世界各地からパフォーマーがやってきて、常時何組もがパフォーマンスを見せて、その芸を競っていることで知られていました。

私が大道芸をはじめてまもなくでしたから、一九八七年か八八年。まだ街頭でのパフォーマンスが今ほど一般的ではないころです。仲間がパリに行った折にポンピドー広場前で大道芸をやりました。そのとき、何人かのパフォーマーと言葉を交わしたそうですが、日本から来たというと、みな意外な顔をしたそうです。当時、いちばん儲かる、いちばん行きたい国というのが、実は日本だったというのです。「日本はハットマネーに百円が入るといふが本当か」

と聞かれたそうです。私たちが実演した場合、当時、百円の投げ銭を入れてくれる人はそれほど多くはありませんでした。多くは十円玉。五円や一円もかなりありました。でも歩行者天国などときどき見る外国人のパフォーマーの帽子には百円玉がどんどん入っていました。それは彼らにとってもかなりの高額で、円高の日本は極めて魅力的だったのです。

また話がそれてしまいましたが、竹の子族などの陰であまり表には出ませんでした。かなりのストリート・パフォーマーが円高の日本にやってきていたのです。そして彼らに触発されて日本人のパフォーマーも少しずつ現れはじめました。その動きをさらに促進したのが、「クラウン・カレッジ・ジャパン」というサーカス学校の設立でした。これはリングリングサーカスの日本公演が引き金になって作られたクラウン養成学校です。たぶんリングリングサーカスの関連会社の運営だったはずですが。

サーカスではクラウンはとても重要な存在です。でも、サーカスの花形芸といえば、空中ブランコも綱わたりも動物芸もある。なのにあえてクラウンを養成しようとしたのはなぜなのか。また、サーカス自体が下火になっている日本でその芸人を養成しようとしたのはなぜなのか。私にはよくわかりません。新しいサーカスでも設立するつもりだったのでしょうか。とにかくクラウン学校ができ、そこで学ぶ者も現れた。残念ながらこの学校は、一九八九年から九一年までのわずか三年で幕を閉じてしまいます。でも、これは学校の主催者の意図ではなかったと思うのですが、ここで学んだ者たちが実演の場を求めてぞくぞくと街に飛び出していったのです。

私の記憶では、一九九一年の春、桜の季節。上野公園は十数メートルおきに大道芸の輪ができていましたが、そのパフォーマーのほとんどが日本人で、しかもかなり達者なのに目をみはりました。それまでも日本人のパフォーマーはいましたが、私が見た限り、たいがい、どこか無理があつて、お客も遠まきで、投げ銭の集まり具合も芳しくないようでしたから、この光景に新時代の到来を感じたものです。彼らがクラウンカレッジ出身者だと知ったのはしばらく



くたってからです。日本のサーカスにとってこの学校がどれほどの意味を持ったのか私にはわかりませんが、少なくとも日本の大道芸にとってこの学校の果たした役割はかなり大きかったといえるでしょう。ちなみに、私たちが浅草で投げ銭公演をはじめた理由の一つには、これらの日本人パフォーマーに刺激されたこともあります。

上野公園ばかりではありません。井の頭公園や横浜の山下公園にも、新宿や原宿などの歩行者天国にも彼らは出掛けていきましたし、各地にできた遊園地やテーマパークなども彼らの仕事場だったようです。ガマの油やバナナの叩き売りなどを求めたのが日本風のテーマパークだったのに対して、彼らを求めたのはいうまでもなくヨーロッパ風のそうした場所です。東京デイズニールランドとそれに触発されてできた各地のテーマパークは、どこも豪華絢爛、きらびやかな夢の世界です。その夢の世界を案内するナビゲーターにはクラウンはもってこいでした。そういう意味ではクラウン学校の主催者には先見の明があったのかもしれませんが。

またこの時期は、いわゆるバブルの最盛期です。大掛かりな地域開発で街並みが大変身しました。古い街並みを壊して、まったく新しい街並みができる。奇抜なデザインのファッショビルがつぎつぎにできて、それらのビル群にはしゃれた遊歩道がつきものでした。それらのビルやそれを包む街、そこにオープンした店などを紹介する雑誌やテレビ番組、あるいは都市論の本などがぞくぞく登場したのもこのころで、街そのものに人々の関心が向かいました。こうした風潮に誘われて、遊び感覚あふれる歩行者が街へくりだし、こうした街をぶらつくことがファッションにもなった。生活感の薄いおとぎの国のようなその景観は、街そのものが遊園地という印象です。それだけにサーカスのクラウン芸を基調にした大道芸はびつたりで、また、街並みを見ながらゆったりと歩くことが目的の歩行者にも、それを楽しむだけの余裕があったのです。

街の遊園地化といえましょうか、イミテーションの街といえましょうか、その傾向は大規模な開発ほど顕著です。東京でいえば、多摩地域や臨海副都心、横浜ならみなとみらい地区、大阪の天保山ハーバーヴィレッジ、神戸ハーバ

ーランド、長崎のオランダ村、ハウステンボスなど、ほとんど遊園地です。当然、これらの地区にできた広場も彼らの公演場所になりました。これらの中にはのちに大道芸を積極的に街づくりに取り入れた地区もあります。

こうした下地のうえに大道芸大会が行われるようになりました。大道芸大会とは、いうまでもなく、大道芸をメインにすえてお客を集めるイベントです。それには、大道芸人がたくさんいなければなりませんし、それを見てみたいと思うたくさんのお客がいなければなりません。一九五四年にはじまった富山のちんどん大会は、ちんどん屋さんという特定の業種を集めた催しですから、ちよつと意味あいが違いますが、何種類もの大道芸を集めた大きな大会が盛んになるのは、こうした下地ができあがった八〇年代以降のことです。

その先駆けとなったのは、名古屋の大道町人まつりで一九七八年に始まっています。京都の映画村がヒントになったのか、浅草の奥山まつりもこの年に一回目が行われていますから、発想自体はそれほど奇抜だったわけではありません。名古屋の大須観音を中心とした界限は、江戸時代からの門前町で、むかしは浅草同様、大道芸や見世物のメッカで、現在でも芝居小屋や寄席などがあって、独特の雰囲気を持っています。しかし、これも浅草同様、戦後は急速にさびれてしまっていました。そこでこの街並みを活かした、街おこしイベントとして生まれたのがこの祭りでした。おいらん道中やパレードなどありますが、メインは何十組も出演する大道芸で、演者は観客から投げ銭をもらうという形で評判になり、毎年何十万人もの人出でにぎわって現在にいたっています。神社仏閣や小祠などのある界限の雰囲気から、ガマの油やバナナの叩き売り、見世物など、日本古来の大道芸も多く出演するのが特徴です。

これに対して一九八六年に始まった横浜・野毛の大道芸フェスティバルは、日本の大道芸ばかりでなく、外国風の、サーカス芸のようなものも招いていました。これはおそらく、横浜の異国情緒を意識してのものだったのでしょうし、また、初期にこの企画に携わっていた方がフランスのサーカスに在籍したことがあるということ、サーカス系のパフォーマーが増えていたことなども大きく作用したのでしょう。はじめのころは年に二回、春と秋に行っていましたが、

最近春に大々的に行うようになっていきます。投げ銭というシステムを盛んに強調して、伊藤多喜雄とそのバンドは二日で百万円以上の投げ銭をあげたといっています。

これほど規模は大きくなくとも大道芸大会は各地でいくつも行われていましたが、大道芸大会の決定版として登場したのが、一九九二年からはじまった静岡市の大道芸ワールドカップです。これは世界各国から芸人を招聘して、審査を行い、優秀者には賞金二万ドルが授与されるという催しです。まさしくバブルの象徴のような催しですが、主催者の発表によれば年々規模を拡大し、現在では四、五日の期間中に百五十万人以上の観客を集めるまでになっています。会場は静岡市の駿府公園（駿河城跡）と街のなかの演技ポイント。そして審査には市民があたります。

私がこの大会を決定版だというのは、審査という形式をもちこんだことで大道芸のスタイルを均一化させたと思うからです。数百人の観客を前にして、決められた時間で演技を終了させ、投げ銭は最後に行くというスタイルです。それではければ審査がしにくいからです。それまでであったいろいろな大道芸の形が一つの形式に整えられたとはいえるでしょう。ここではガマの油やバナナの叩き売りといった大道芸は登場しません。投げ銭という方法ではないし、見せ方も演技時間も審査にそぐわないからです。「泣きバイ」などはもちろん論外。一人ひとりからお金を徴収する「手相」も、家相の絵解きも、薬草売りもヤマガラの曲芸もだめです。ここで対象となる大道芸とは、いわゆるショー形式に限られます。投げ銭とはショーの見物料のことなのです。

ジャグリングが多いのもうなずけるでしょう。ジャグリングをはじめとした曲芸や軽業、パントマイム、手品などのサーカスに取り入れられた演芸こそが、このシステムに対応できる芸能だったのです。大向こうをうならせて拍手をもらう芸。こうした大道芸では観客の拍手イコール投げ銭です。ガマの油やバナナの叩き売りは拍手をもらう芸ではありません。知らず知らずのうちにお客の懐を緩ませて、物を買わせる芸です。そうした、日本の伝統的な、従来からの大道芸という形式は、こうした大会にはむきません。こうした大会に出演する日本のパフォーマーたちが目指

すのが、サーカス芸になるのは当然です。極論すれば、現在の大道芸大会とは、テントをなくし、街全体を演技会場としたサーカスのことだと言ってもいいかもしれません。こうして大会は、大阪の天保山、所沢のミューズ、東京の三軒茶屋などで毎年恒例で行われており、おそらく私の知らないいくつもの大会が行われていることでしょう。

大会が盛んになる一方で、皮肉にも街なかに自然発生的に起こった大道芸は長続きせず、つぎつぎになくなってしまいました。上野公園に関していえば、公園の管理責任は東京都にあり、大道芸はそこで無断で行われていたのですが、あまり盛んになりすぎたのでしよう。一九九二年頃には「公園内での金銭徴収を目的とした行為を禁止する」旨の立て札が日本語、英語、そしてイラン語で張り出され、ほとんど芸人を見掛けることはなくなりました。歩行者天国も同様です。歩行者天国とは言っても、それはあくまでも道路であって、立ち止まったり営業してはいけません。つまり、大道芸は道路交通法違反の行為なのです。いままで大道芸ができたのは、公園同様、見逃されていただけだったので。これも取り締まりが厳しくなりました。同時に、歩行者天国見直しの機運が高まり、歩行者天国自体がなくなり始めると、急速に大道芸を街なかで見掛けることは少なくなっていきました。

いま大道芸といえば、だれもが大道芸大会を思うようになってきたといえるのではないのでしょうか。ガマの油やバナナの叩き売りなどの、一九七〇年ごろにはかろうじて生き残っていた大道芸が寄席芸にとりこまれたように、八〇年代に歩行者天国からわきあがったサーカス系の大道芸は大道芸大会に囲い込まれていったのです。

こうして一九七〇年から約三〇年間の大道芸を概観してみようのは、大道芸という名称は同じでも、実体はこの三〇年の間にすっかり変わってしまったということ。三〇年前に大道芸といわれていたものはほとんど姿を消し、いくつかは「無形文化財」となって保存されていますが、もはや大道芸とは誰も思わないし、むかしのようには演じられることはまずない、というのが現状でしょう。現在の大道芸は、三〇年前にはほとんど存在しなかった芸能です。それは投げ銭という形式をとった、サーカスのクラウン芸を基本にしたバラエティショーです。

日本古来からの曲芸や軽業、あるいは祭りの場でそれらを見せていた見世物小屋などもいまはほとんど消えました。最初に申し上げたように、「見世物学会」を作ろうという気運は見世物屋さんや二軒だけになってしまったから生まれたのです。サーカスもわずかに四軒にすぎません。これをみればこれらの芸能は瀕死の状態といえるでしょう。でも、幕末から明治初年の、曲芸や軽業、あるいは見世物小屋を描いた外国人のスケッチを見ると、現在の大道芸大会で行われている芸とまったく同じものが描かれています。もちろん、演者の姿やスタイルは洋装に変わっていますが、芸自体は変わりません。幕末の曲芸、軽業の大道芸は、明治初年に小屋に取り込まれて街なかからは姿を消してしまい、一九七〇年ごろには影も形もなかったのです。それが一五〇年の時をへて、囲い込まれたサーカステント、見世物小屋を飛び出し、——それが大会という限られた空間ではあっても——隔世遺伝のように大道芸として蘇った、といつて言えないこともないでしょう。

大道芸と言いながら、大道芸大会と公認の広場以外では見ることができなくなってしまったことは寂しく思います。が、消滅するかと思えばヒヨンなどところから芽が出て大きくなり、大きくなり過ぎてまた叩かれて……という繰り返しで芸はつながっていくのかもしれませんが。まして法治国家では大道芸はそもそも違法行為。それは宿命なのでしょう。事実、大道芸大会の芸とはまったく異質の道端の芸能——たとえば墨でへたな字を書いて売っていたり、三〇年ぐらい前のフォークソングをギター一本で歌っていたり——を街で見掛けることが最近多くなってきました。これがこれからのように育つのか、あるいはさらにグレードアップした何かが出てくるのか。私にはまったく予測が付きませんが、それだけに、大道芸に対する興味はさらに高まるのです。

大変長くなって申し訳ありません。

(かみじま・としあき 大衆芸能)

# 現代・大道芸年表 (1970～1997)

★1970(昭和45年)

- 1月 原爆奇形を見世物に。被爆団体から抗議  
寄席、人形町「末広」閉幕
- 国立ポーランドサーカス来日
- 3月 大阪で万国博覧会
- 4月 富山で全国ちんどん大会(第16回) 優勝・万宣社(名古屋)
- 5月 ポリシヨイサーカス、五年ぶりに来日
- 6月 浅草木馬亭、浪曲定席に
- このころ、野外劇が盛ん
- 7月 劇団天井敷と状況劇場がソニービルで前衛紙芝居
- 9月 小沢昭一、永六輔、関山和夫らで節談説教の会
- 12月 インド大魔術団来日
- すみだ劇場閉幕
- この年、東京にも歩行者天国登場

三島由紀夫割腹自殺

★1971(昭和46年)

- 1月 目黒名人会閉幕
- 本牧亭、講談定席終焉
- 4月 とやまちんどん大会(第17回) 優勝・みどり家(東京)
- 小沢昭一、レコード「日本の放浪芸」発表
- 6月 上野納涼まつりで、ちんどんコンクール
- 7月 ロンドン大魔術団来日
- この年、劇団民芸、俳優座、文学座に退団者続出
- 大映倒産
- 10月 寅次郎、デイスカバー日本のポスターに
- 12月 カルカッタ大魔術団来日
- 国立劇場、開場5周年

★1972(昭和47年)

- 2月 「紙芝居昭和史」映画化へ
- 浅間山荘事件
- 民俗芸能ブーム。ふるさとブーム。

札幌五輪

ルパン島で小野田さん  
発見

★1973(昭和48年)

- 2月 ベトナム戦争終結
- 石油ショック
- 買い占め騒ぎ
- 4月 美空ひばり、弟の暴力団交遊で一年の劇場締め出し
- 浅草松竹演芸場での「デン助劇場」終焉
- とやまちんどん大会(第19回) 優勝・万宣社(名古屋)
- 伝統的な音レコードに。「警女唄」「平曲」「隠れ切支丹」など
- 11月 パンチとジュディ人形劇来日

★1974(昭和49年)

小野田さん帰国

長島、引退

★1975(昭和50年)

- 3月 小沢昭一、芸術選奨文部大臣新人賞
- 4月 モナ・リザ展
- ストリーキング流行
- ペンポスターどもサーカス来日
- とやまちんどん大会(第20回) 優勝・万宣社(名古屋)
- 5月 小沢昭一、芸能座結成
- 7月 上海雑技団来日
- 上野納涼祭、ちんどん大会など
- 8月 映画「エクソシスト」人気
- 流しの歌手コンクール「ネオン街音楽祭」
- 宝塚歌劇「ベルサイユのばら」大ヒット
- 小沢昭一、雑誌「芸能東西」発行、芸能座旗揚げ
- とやまちんどん大会(第21回) 優勝・常ちゃん(東京)
- 連続テレビドラマ「ちんどん」(NTV) 放映
- 寺山修司、市街劇「ノック」で騒動
- 映画「鬼の詩」公開
- 津軽三味線の高橋竹山人気
- 警女の伊平タケ、コンサート
- 名古屋で大須まつり(第1回)



10月 荒神琵琶、警女、貝祭文など語り物公演、国立劇場  
11月 坂本長利「土佐源氏」118回公演、VAN 99ホール  
12月 三億円事件、時効  
黒テントへの公園使用許可をめぐり裁判、劇団側敗訴

★1976(昭和51年)

ロッキード事件  
およげ!たいやきくん

田中角栄逮捕

3月 上海京劇団来日  
無形民俗文化財の指定制度できる  
4月 麻布の寺で縁日再現、大道芸クローズアップ  
とやまちゃんどん大会(第22回)優勝・常ちゃん(東京)  
早稲田小劇場、東京脱出。富山県利賀に  
大須まつり(第2回)二〇万の出入  
6月 浅草復興を掲げ、「浅草ふきよせ乃会」はじまる  
現代風俗研究会発足  
9月 知多万歳、記録映画に  
11月 映画「フェリーニの道化師」公開  
12月 無形民俗文化財に秋田万歳など

★1977(昭和52年)

1月 台北綜合曲技団来日  
2月 映画「竹山ひとり旅」公開(新藤兼人監督、この年の山路ふみ子賞受賞)  
3月 帝劇「津軽三味線ながれぶし」公演  
アメリカのサーカス来日  
サーカス本の出版つく  
4月 とやまちゃんどん大会(第23回)優勝・常ちゃん(東京)  
日劇レビュー終焉  
日本口承文芸学会発足  
5月 鳳山仮面劇来日  
6月 浅草木馬館、安来節公演終焉  
7月 浅草木馬館、大衆演劇開始  
インド大魔術団来日  
8月 ふるさとブーム、資料館各地にぞくぞくと  
9月 映画「小人の饗宴」公開  
10月 浅草公会堂開場  
11月 映画「はなれ警女おりん」公開  
12月 秩父夜祭りに露店、出店を拒否

★1978(昭和53年)

4月 とやまちゃんどん大会(第24回)優勝・常ちゃん(東京)  
キャンディーズ解散/ピンクレディー人気  
5月 落語協会分裂。円生一門脱退  
7月 17年ぶり、両国花火大会復活  
浅草で大衆演劇祭  
8月 三木のり平「かっぱ梅坊主」公演  
9月 ギリヤーク尼崎、踊りつづけて十年。米公演  
坂本長利「土佐源氏」海外へ  
10月 浅草で東京浅草まつり。境内に奥山風景  
太秦映画村3周年。年間二百万の入場者  
のり平、サーカスの演出  
11月 キグレサーカスでロープ演技中に墜落死  
横浜、伊勢崎町に買い物公園

★1979(昭和54年)

2月 キグレは東京、関根は横浜で公演  
秋田の「猿倉人形芝居」世界へ  
3月 国立演芸場開場  
とやまちゃんどん大会(第25回)優勝・小鶴家(東京)  
4月 武漢曲技団来日  
6月 民音公演「東京のうた」大音楽、大道芸、ちんどん出演  
7月 ギリシャ映画「旅芸人の記録」公開  
8月 日劇、国際、両劇場にサーカス  
中国京劇団来日  
インベーダーゲーム流行

★1980(昭和55年)

1月 鬼太鼓座、初の自主公演  
2月 国立劇場が寄席囃子さんの養成  
3月 野外コンサート盛ん  
4月 民謡ブーム。河内音頭の著作権問題で金沢明子訴訟に  
5月 国立劇場で「芸名人集」  
6月 芸能座(小沢昭一)、最終公演で紀伊国屋演劇賞  
7月

# 大道芸と現代

イエスの方舟事件

モスクワ五輪

★1981(昭和56年)

佐川君、パリでバラバラ殺人

★1982(昭和57年)

東京キッドブラザース、関根サーカスの大テントで公演

花柳幻舟、寿輔家元を刺す

新宿西口の都府地をサーカスに貸与。笹川関与。

青空デイスコ、原宿に定着(竹の子族)

サーカス小屋使つて、ジャズコンサート

国立演芸場で大神楽公演(日本の曲芸)

周防猿まわしの会の記録映画完成

とやまちんどん大会(第26回)優勝・みどり家(東京)

各地の大衆演劇座長大会に人気

お笑いブーム/上方漫才東京へ渡り込み

のり平、森繁、サーカス演出

東宝演芸場開幕

下町風俗資料館開幕

伊勢大神楽、無形民俗文化財に

説経節・若松若太夫、復活

早野凡平、芸術祭受賞

1月 上海からパンダのサーカス。横浜でパンダが調教師に噛みつく

宮本常一没、73歳

2月 浅草の演歌(アコ)村井しげるワンマンショー

3月 映画「ええじゃないか」公開

4月 とやまちんどん大会(第27回)優勝・小鶴家(東京)

5月 生きている人形展、開催

6月 小沢昭一、井上ひさしが「しゃぼん玉座」結成

7月 警女・小林ハル、自伝出版

8月 浅草でサンバカーニバル開始

9月 明年3月に国際劇場閉幕が決定

10月 国際シンボ「見世物と民衆娯楽」開催

11月 江川マストン、浅草松竹演芸場に出演

12月 韓国のパンソリ来日

ボリショイサーカス来日

4月 とやまちんどん大会(第28回)優勝・みどり家(東京)

★1983(昭和58年)

5月 説経節、薩摩・若松、両若太夫共演。

11月 警女に45年ぶりに弟子が

12月 バイオリン演歌のオッペケ会結成。芸術祭に

坂野比呂志、芸術祭大賞

○ パフォーマンスと銘打った催し盛んに

3月 説経節、娘義太夫など「語り物」の連続公演

4月 富山全国ちんどん大会(第29回)優勝・みどり家(東京)

5月 説経節の若松若太夫に弟子

6月 ボリショイサーカス来日、同水上サーカス来日

7月 下町まつりに大道芸が集合

8月 韓国のサムルノリ来日

9月 マルソー来日

10月 仏の劇団クロマク来日(サーカスや大道芸を舞台に)

★1984(昭和59年)

3月 映画「薩摩盲僧琵琶」公開

4月 説経節・若松若太夫に

弟子(政太夫)誕生

5月 富山市で第30回とやま

チンドン大会開催

6月 韓国の「病身舞」公演

7月 若松若太夫のLP発売

8月 韓国の鳳山舞踊劇上演

9月 名古屋で第7回大須大道町人祭

「放浪芸の世界」公演

・セミナー

11月 ビデオ「新・日本の放浪芸」発売

★1985(昭和60年)

4月 とやまチンドン大会(第31回)

5月 台湾の布袋戯上演

6月 大須大道町人祭(第8回)

7月 新語大賞に「パフォーマンス」

科学万博

7月 大江戸観光倶楽部誕生

10月 浅草祭・奥山風景

★1986 (昭和61年)

2月 パンダのサーカス公演

ダイアナ来日4月 とやまチンドン大会 (第32回)

横浜で第1回野毛大道芸開催

10月 野毛大道芸 (第2回)

大須大道町人祭 (第9回)

7月 ほおずき市大道芸フェス (第1回)

★1987 (昭和62年)

4月 野毛大道芸 (第3回)

とやまチンドン大会 (第33回)

国鉄分割民営

7月 新聞記事「大道芸の衰退」

三宅島

8月 ポリシヨイサーカス公演

と猿舞座の共演 (長野県)

セゾン劇場「世界の道化」公演

大韓機事故

10月 野毛大道芸 (第4回)

大須大道町人祭 (第10回)

大神楽曲芸協会50周年公演

★1988 (昭和63年)

4月 野毛大道芸 (第5回)

とやまチンドン大会 (第34回)

リクルート

7月 インド祭 (東京・上野他)

8月 ポリシヨイサーカス公演

リングリングサーカス公演

天皇重体

10月 大須大道町人祭 (第11回)

野毛大道芸 (第6回)

天皇の病気で自粛、中止

12月 若松若太夫芸術祭受賞

★1989 (平成1年)

3月 『サーカス放浪記』出版

天皇崩御

地方博覧会花ざかり

(ふるさと創生1億円)

消費税開始

4月 とやまチンドン大会 (第35回)

5月 野毛大道芸 (第7回)

坂野比呂志没

5月 大正村公演

7月 クラウン・カレッジ・ジャパン 開講

阿蘇猿まわし劇場開場

8月 リングリングサーカス公演

10月 ギリヤーク尼崎活動20年

野毛大道芸 (第8回)

大須大道町人祭 (第12回)

ベルリン壁

12月 バイオリン演奏・

桜井敏雄芸術祭受賞

1990 (平成2年)

1月 東京デイズニールランド

3月 1兆円産業へ (83年開場)

周防猿まわしの会代表・

4月 野毛大道芸 (第9回)

とやまチンドン大会 (第36回)

村崎義正没

流行語バブル

10月 大須大道町人祭 (第13回)

野毛大道芸 (第10回)

★1991 (平成3年)

1月 大神楽マニラ公演

2月 「猿まわし通信」刊行

3月 ポリシヨイ舞台サーカス

4月 野毛大道芸 (第11回)

とやまチンドン大会 (第37回)

警女歌継承へネットワーク

このころから翌年にかけて、

上野公園で大道芸花ざかり

10月 猿まわし、人間ポンプ、

ギリヤーク芸術祭出演

野毛大道芸 (第12回)

大須大道町人祭 (第14回)

10月 「最後の見世物・人間ポンプ」公演

7月 ほおずき市大道芸フェス (第4回) 坂野追悼

大正村公演

5月 大正村公演 (猿舞座・伊勢大神楽も)

7月 ほおずき市大道芸フェス (第6回)

10月 「最後の見世物・人間ポンプ」公演

8月 ▲佐渡・鼓童セレブレーションに猿舞座 (村崎と)

10月 ▲伊勢大神楽東京公演

1月 ▲伊勢大神楽に初参加 (以後、たびたび参加)

大道芸と現代

ソ連解体

12月 猿まわし・村崎太郎、  
芸術祭賞受賞

★1992 (平成4年)

2月 CD「東京ちんどん」発売  
4月 暴力団新法実施  
野毛大道芸(第13回)

とやまチンドン大会(第38回)

シルク・ド・ソレイユ来日  
7月 ポリショイサーカス公演

10月 野毛大道芸(第14回)

大須大道町人祭(第15回)

11月 静岡大道芸W杯(第1回)

1月 浅草ロック投げ銭公演を  
開始(以後月1回)

5月 大正村公演

7月 ほおずき市大道芸フェス  
(第7回)

バブル景気  
終焉

★1993 (平成5年)

3月 木下サーカス公演  
4月 江戸東京博物館オープン

野毛大道芸(第15回)

とやまチンドン大会(第39回)

ペンボスタ子どもサーカス来日  
8月 大阪天保山海遊館前広場で  
大道芸を公認

10月 野毛大道芸(第16回)

大須大道町人祭(第16回)

11月 静岡大道芸W杯(第2回)

5月 大正村公演

6月 「えとぎの世界」公演

7月 ほおずき市大道芸フェス  
(第8回)

★1994 (平成6年)

1月 江戸大神楽・鏡味小仙襲名  
3月 サルティンバンコ公演開始

4月 とやまチンドン大会(第40回)

野毛大道芸(第17回)

8月 パリで日本の緑日  
10月 野毛大道芸(第18回)

大須大道町人祭(第17回)

11月 静岡大道芸W杯(第3回)

4月 とやまチンドン大会出場

5月 大正村公演

7月 ほおずき市大道芸フェス  
(第9回)

★1995 (平成7年)

11月 静岡大道芸W杯(第3回)

阪神大震災

地下鉄サリン

都市博中止

5月 野毛大道芸(第19回)

とやまチンドン大会(第41回)

大須大道町人祭(第18回)

10月 インドの紙芝居来日

11月 大須大道町人祭(第19回)

静岡大道芸W杯(第4回)

映画「旅する

パオジャンフー」上映

スーパージャンフー公演

人間ポンプ・安田里美没

★1996 (平成8年)

1月 歩行者天国見直しへ

2月 桜井敏雄没

3月 海外からネオシルク続々来日

(フアンタージャ、アレグリア、  
広州雑技団、武漢雑技団)

4月 野毛大道芸(第20回)

とやまチンドン大会(第42回)

クラウンカーニバル豊島園公演

「サーカスが来た」展」開催

「ジャガールのサーカス展」開催

フジTV移転6月 江戸東京博で

「路上の芸人」公演

このころから、横浜ランドマ

クタワ、ドッグ脇で大道芸始

まる

10月 布袋戯公演

大須大道町人祭(第19回)

11月 静岡大道芸W杯(第5回)

「見世物世紀末」出版

4月 ▲モンキーセンターで

5月 大正村公演

7月 ほおずき市大道芸フェス  
(第10回)

10月 「安田里美・  
最後の見世物」公演

浅草ロック投げ銭公演

最終公演

★1997 (平成9年)

11月 浅草ロック投げ銭公演

最終公演

	2月	博多名物の屋台に規制	
	4月	源吾郎、国際紙芝居協会旗揚げ	4月▲佐賀鹿島花見会場で
		野毛大道芸(第21回)	
		とやまチンドン大会(第43回)	
		ドリームエンジェルサーカス	5月 大正村公演
		開幕、7月までに20万人突破	早大・寅さんの風景
神戸少年A	7月	曲こま師・やなぎ女楽没	7月 ほおずき市大道芸フェス
逮捕		上野公園・青空カラオケ	(第12回)
		幕閉じる	
もののけ姫	8月	サーカスの村を作る計画実現へ	8月▲猿回し大道芸里めぐり
ヒット	10月	新宿歌舞伎町で	佐渡紀行
		パフォーマンス・コンテスト	
		新国立劇場こけら落とし	
		大須大道町人祭(第20回)	
山一証券	11月	世田谷・三茶DE大道芸(第1回)	10月 明治村招待公演
自主廃業へ		静岡大道芸W杯(第6回)	11月▲中国芸術祭へ
		大神楽曲芸協会60周年記念	